

インバウンド感染症の動向について 2022

本康医院 本康宗信・静岡薬剤耐性菌制御チーム
静岡県立静岡がんセンター 感染症内科 倉井華子

2018年11,12月の通報25,26ではラグビーワールドカップ、東京オリパラ2020の開催で予想される海外からの輸入感染症について情報共有をさせていただきました。しかしその後COVID-19感染拡大により海外との交流が激減し、輸入感染症も増加せず、国内での予防対策の徹底もあり、例年みられていたインフルエンザ、咽頭結膜熱などが激減しました。COVID-19は終息していませんが、今後は旅行者の行き来も多くなっていきますので、再度インバウンド感染症にも目を向ける必要があります。今回は、サル痘とここ2年鳴りを潜めていたインフルエンザについてまとめました。

2022年7月9日に国立国際医療研究センターからサル痘の診療指針 ver.1.0 が公表されました([20220708_monkeypox_manual.pdf\(ncgm.go.jp\)](https://ncgm.go.jp/20220708_monkeypox_manual.pdf))。

サル痘はサル痘ウイルス(monkeypox virus)によって飛沫、接触感染して発症します。1980年に世界から根絶された天然痘に病態がよく似ており、症状だけでこれら2つの疾患を鑑別することは困難と言われています。サル痘という名前ですが、宿主はげっ歯類と考えられています。今回のアウトブレイクでは、MSM(Men Who Have Sex with Men)の間で発生した症例が多く、性交渉による接触が感染の一因とも考えられています¹⁾。サル痘は潜伏期が7~17日で、水疱や痂皮が混合して見られる水痘と異なり、均一に進行した水疱が認められます。しかし、サル痘では人から人へ感染する頻度は天然痘よりも低く、また重症度も天然痘よりも低いとされています。中央アフリカ、西アフリカから流行が始まり、欧米へ広がりましたが、最近では韓国、シンガポールでも症例が確認されており、インバウンド解禁とともに本邦でも確認される可能性が今後出てくると考えられます。診断には、のう胞の内容液や組織を用いたPCR検査が必要ですが、市販されていません。疑われた場合には4類感染症ですので、管轄の保健所に相談します²⁾。

天然痘ワクチン予防接種(種痘)はサル痘にも有効と言われています。コンゴ民主共和国では、天然痘ワクチンを接種していた人は、未接種者よりもサル痘の感染リスクが5.2倍低下したと報告されています³⁾。天然痘は、1956年以降に国内での発生はなく、1976年にワクチン接種が廃止されています。1976年以降日本では種痘は行われていませんので、接種を受けていない方も多くなっています。また種痘の経験もない医師も多いと思います。今後、英国のように一部で種痘が再開されるとしても、接種方法を新たに学習する機会が必要になります。

天然痘ワクチンの接種では、針先が二股に分かれた専用の針をワクチンに浸し、針を皮膚面に直角になるように保持し、出血しない程度に針先で15回程度皮膚を傷つけ、ワクチンを接種します。その後、ワクチンのウイルスが他の部位や他の人に広がらないよう、接種した部位をドレッシング材で覆います。ワクチン接種の7日ほど後に小さな水疱ができれば、予防接種は成功したとみなされます。日本における種痘の多くは上腕上部にされていたので、接種を受けた方は瘢痕が確認できます。BCGの瘢痕とは異なり、円形でやや不整な瘢痕です。

特異的な治療法はありませんが、2022年6月には、天然痘の抗ウイルス薬 tecovirimat をサル痘に投与する臨床研究が国立国際医療研究センター病院で開始されました。

2020年にはほとんど見られなかったRSV感染症は、2021年春には成人も含めて流行が見られました(通報90)。その理由として、2020年にRSVが流行しなかったことで、免疫を持つ方が減っていた可能性があります。2022年には散発していますが、昨年ほどの流行拡大は現時点ではないようです。こうした通常と異なるサイクルや時期に感染流行が見られることがあります。

オーストラリアのニューサウスウェールズ州では5月からインフルエンザだけでなく、RSVも急速に増加しています。そのほか、アデノウイルス、ヒトメタニューモウイルスなど呼吸器感染ウイルスで上昇が認められています4)。

インフルエンザの流行時期が日本と異なり5月～9月頃にピークを迎える南半球のオーストラリアでは、過去2年間はインフルエンザの流行がありませんでしたが、2022年には4月以降に急激なインフルエンザ患者の増加が報告されています(図1)。

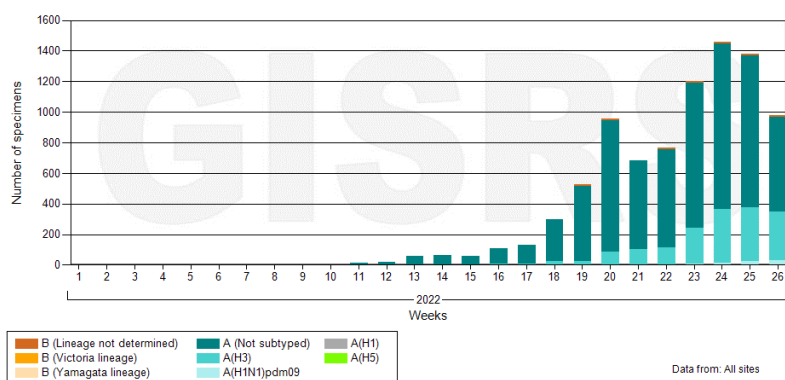


図1 オーストラリアでの2022年インフルエンザ感染者数の推移 [WHO FLUMART OUTPUTS](#)

オーストラリアでのインフルエンザの流行は、その後の日本での流行を予測する上で参考になることが多く、日本でも今年の冬はインフルエンザが流行する可能性があります。特にここ2年間は小児に罹患患者も少なく、ワクチン接種も受けていない方もおられますので、流行が始まると拡大するかもしれません。オーストラリアの24週までの感染者数は増加傾向にあり、A型が主になっています。東京ではすでに学年閉鎖を必要とするインフルエンザの発生があり、ワクチン接種前の時期での感染拡大が懸念されます。例年、インフルエンザワクチンの不足が話題になりますが、同じ時期に注文が殺到することで、早期に不足が生じます。COVID-19と同様に高齢者や基礎疾患を持つ方から接種する認識の共有が望まれます。COVID-19への対応はまだ続きそうですが、新たな感染症にも目を向けておきたいところです。

- 1) Basgoz N, et al.: Case 24-2022: A 31-Year-Old Man with Perianal and Penile Ulcers, Rectal Pain, and Rash. N Engl J Med. 2022 Jun 15. PMID: 35704401doi: 10.1056/NEJMcp2201244
- 2) 石金正裕:サル痘総説 J-IDEO 2022 Vol.6, No.4: 576-585 中外医学社
- 3) Rimoin AW, et al.: Major increase in human monkeypox incidence 30 years after smallpox vaccination campaigns cease in the Democratic Republic of Congo. Proc Natl Acad Sci U S A. 2010 Sep 14;107(37):16262-7. PMID: 20805472 DOI: 10.1073/pnas.1005769107
- 4) [NSW Respiratory Surveillance Report - week ending 18 June 2022](#)